

Title	巴金と晩年魯迅に関する走り書き的覚書：胡愈之・呉克剛・『三田文学』に触れて
Sub Title	A memorandum about Bajin and Lu Xun's later years : referring to Hu Yuzhi and Wu Kegang
Author	長堀, 祐造(Nagahori, Yūzō)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2016
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.111, (2016. 12) ,p.1 (204)- 18 (187)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	関根謙教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01110001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

巴金と晩年魯迅に関する走り書き的覚書

——胡愈之・呉克剛・『三田文学』に触れて¹

長堀 祐造

はじめに

本稿では、魯迅研究の立場から、関連の先行研究に依拠しつつ、晩年の魯迅と巴金の関係、互いの評価を、国防文学論戦時期の事跡から確認する。また、魯迅と巴金が知り合う経緯について、いくつかの可能性を探り、魯迅、巴金共通の知人、胡愈之が実務を取り仕切った魯迅の葬儀における中共の関与と巴金の立場や、魯迅生前の信条に反して棺にかけられた「民族魂」の旗の意味を吟味しつつ、巴金が魯迅から聞いたと言う「私を忘れなさい」という「遺言」、「勸告」の意味を考える。次いで最後に、巴金の友人、アナキスト呉克剛が魯迅の死に際して書いた追悼文を、奥野信太郎による『三田文学』への訳載とあわせて紹介する。

一、魯迅の棺を担いだ巴金——晩年魯迅の巴金評価

魯迅最晩年の一九三六年夏、中国の左翼文壇では、国防文学論戦と呼ばれる論争が起った。これは、抗日民族統一戦線の

路線をめぐる文芸界における論争であり、「国防文学」と「民族解放戦争の大衆文学」という二つのスローガンが対立したが、そこには世界的背景があった。ドイツでのナチスの権力掌握（一九三三年一月、ヒトラー首相就任）という事態を受け、一九三五年七月八月、モスクワで開催されたコミンテルン第七回大会は、「資本主義の第三期論」に基づく「中間勢力主要打撃論（社会ファシズム論、つまり主要な敵はナチス、ヒトラーではなく、社民勢力であり、これを叩け、という主張）」という極左方針から一転し、社会民主主義、ブルジョワ民主勢力との関係を求める「人民戦線」戦術を打ち出した。

これを受け、王明ら駐モスクワの中共指導部（中国共産党中央委員会）は、中華ソヴィエト政府（中国蘇維埃中央政府）と名目上連名で十月、パリ発行の『救国報』に八・一宣言を発表し、内戦停止と国防政府、抗日連合軍樹立等呼びかけた。これは反蔣抗日の立場であったが、翌一九三六年五月には、中共は「反蔣抗日」から「逼蔣抗日」とへとさらに舵をきり、蔣介石主導下にある国民党との抗日統一戦線結成を明確に志向する²。これにともない、左翼文壇では、「国防文学」のスローガンが優位に立っていく。そして、この統一戦線方針の障害になるとして、一九三〇年三月に中共の要請で魯迅が常務委員に就任して結成された左翼作家連盟は、周揚、夏衍ら中共黨員の主導により、魯迅の強い反対にも関わらず、一九三五年末には解散へと到る。

魯迅は徹底した階級論者、国際主義者であり、四・一二クーデタでの裏切りや、教え子ともいえる青年作家たちを多数殺害した国民党に対して強烈な怒りを抱いていたため、この統一戦線政策のあり方に強い不満を持っていた。そこで、側近の文学者、胡風、馮雪峰らと協議の上、胡風が起草して発表した文章が、「人民大衆は文学に何を要求するか（人民大衆向文学要求什麼）」（『文学叢報』、一九三六年六月）であった。胡風は、階級協調的な「国防文学」のスローガンに「民族革命戦争の大衆文学」というスローガンを対置した。国防文学派は中国文芸家協会を設立して宣言を発し、一方魯迅らは、この協会に未加入の文学者を主体に中国文芸工作者宣言を出した。しかし、この国防文学論戦は、最終的には中共上層部が調停のり出し、双方のスローガンは矛盾しないとされ、事態は収拾に動き、論戦終結とほぼ同時に魯迅は他界した。この論戦に際して、巴金は魯迅の側に立ち、上記の文芸工作者宣言を友人の作家・編集者、黎烈文と起草し、魯迅はこれに同意したの

であった。³

さて、この論戦の最中に魯迅名で発表されたのが「トロツキー派に答える手紙」（一九三六年七月発表）、「現在のわれわれの文学運動について」（同前）、「徐懋庸に答え、併せて抗日統一戦線問題について」（同年八月発表、以下本稿では「徐懋庸に答え」と略す）、である。前二編は、病気の魯迅に代わり、馮雪峰が起草し、魯迅は公刊前には草稿を見る機会すらなかったことが、今ではわかっている。⁴「徐懋庸に答え」も『魯迅全集』注によれば、魯迅起草の文章ではなく、魯迅の考えに基づいて馮雪峰が起草し、魯迅がその後、加筆修正して発表したものである。魯迅の国防文学論戦での基本的立場を表すものと見なされてきたこれら三編のうち、魯迅が実際に原稿に手を入れ、手稿が現存するのは、この「徐懋庸に答え」のみであるが、この文章で魯迅が引く徐懋庸の魯迅宛原信には以下のような巴金批判が書かれていた。

…まして先生のお側に集まっている「战友」は、巴金や黄源などの連中が含まれる以上、まさか先生は、すべて「文芸家協会」に参加した人々の、一人一人が、巴金や黄源より劣るとはお考えにならないでしょう。僕は、新聞雑誌によって、フランス、スペインの「アナキスト」の反動が、連合戦線を破壊したのは、トロツキー派と同じなことを知っております。中国の「アナキスト」の行為はさらに卑劣です。…（学研版『魯迅全集』第八巻の今村与志雄訳による。…は省略部分を表す。以下同）

これに対して、魯迅は次のように反論して巴金を擁護したのである。

…巴金は、情熱のある、進歩した思想を持つ作家だ。…彼は、なるほど「アナキスト」と言われているが、我々の運動に反対したことはなかったし、文芸工作者の連名した戦闘的宣言に名を連ねていた。黄源も署名していた。こういう翻訳者と作家が抗日の統一戦線に参加することを、我々は歓迎する。わたしは、徐懋庸やその同類が、なぜ、彼ら

を「卑劣」だと言うのか、本当にわからない。：スペインの「アナーキズム」の革命破壊までも、巴金に責任を負わせようとするのだろうか。

ここでの魯迅は、文芸工作者宣言が実は巴金と黎烈文の起草になることには触れず、自分が起草者であるかのように書いている。このことについて、丸山昇は、「徐懋庸に答え」の馮雪峰による草稿と魯迅の修訂後の手稿テキストを比較した上で、以下のような見解を示している。

：「文芸工作者宣言」は、巴金と黎烈文が相談し起草して魯迅の同意を得たものであることは、巴金自身も後に明言しているところであり、馮雪峰（の草稿―長堀注）は事実をそのまま書いたのだろうか、魯迅は巴金が発起したというのを名を連ねたと改めた。「文芸工作者宣言」が巴金の発起になるとすることがまた無意味な紛糾を引き起こすのを避けるために、敢えて自分が前面に出たのだろうか。（『魯迅・文学・歴史』一八八頁）

いずれにせよ、ここには魯迅の巴金評価、擁護の姿勢が明確である。国防文学論戦では、魯迅は周揚たちから共産党の指導に従わない「統一戦線の破壊者」、「トロツキスト」と非難され、巴金は徐懋庸から「卑劣なアナキスト」と非難されたのだが、こうした「トロツキスト」や「アナキスト」という反対者へのレッテル貼りに対して、魯迅は反発を示している。もちろん、巴金自身も徐懋庸のアナキストがスペイン人民戦線の破壊者だという非難がデマだと反論している。スペインのその後の敗北は、スターリン、コミンテルンの日和見主義、セクト主義に一因があることは今日では歴史学の常識であろう。

この国防文学論戦は、おそらくは病身の魯迅の寿命を縮めることになったであろう。上述のとおり、中共が介入しての論戦收拾とほぼ時を同じくして、一九三六年十月十九日の早朝、魯迅は逝去したのである。魯迅の遺体はその日のうちに、万国殯儀館に移され、翌二十日の午前から、二二日の昼まで遺体告別の儀が行なわれた。内山完造によれば約一万の人々が魯

迅に別れを告げるために訪れたとい⁷。実際、半世紀後の『上海魯迅研究（3）』（上海魯迅紀念館編、一九八九年二月）掲載の「送殯者（葬送参列者）登記簿録」に付された「瞻仰魯迅遗体名单統計（遗体告别者名簿統計）」によれば、この三日間で魯迅に別れを告げた人々の数は個人だけでも一〇、四二九人に上ることが確認できる。

この魯迅の葬儀には巴金も当然のことながら出席している。それだけでなく、巴金は魯迅の棺を担いだ十二人とも、十六人とも言われるうちの一人であった。茅盾夫人孔德沚の弟で魯迅とも交流のあった作家、編集者、孔另境の長女、孔海珠の著『魯迅―最後の告别』（人民文学出版社、二〇一一年。初版は『痛別魯迅』上海社会科学出版社、二〇〇四年）は魯迅の葬儀の詳細を考証して興味深い本だが、これによれば、魯迅の棺は告別のため安置された万国殯儀館のホールから靈柩車へ移されるときと、靈柩車から下ろされ埋葬されるとき二度、関係者によって担がれている。そしてこのとき、巴金は二度とも魯迅の棺を担いでいたのである。最初の方は、魯迅の棺を先頭で担いでおり、その写真と映像が残っていて、筆者も上海魯迅紀念館でこの映像を見たことがある。一方、埋葬の際の映像や写真は残っていないのだが、巴金自身がこのときも棺を担いでいたことを回想する文章を書いていた。

墓地につき、儀式が執り行われると、十三、四人が棺を持ち上げた。あの記念堂で弔辞を読んだ友人が突然、人群れの中から跳びだしてきて、棺の底面に手を置いて支え持った様子に、私は痛く感動させられた。…棺を墓穴に運ぶ途中、棺はどんどん重くなっていった。

さらに、半世紀近くを経て、巴金は再びこう書いた。

もう四十五年になるが、「私を忘れなさい」という声が、私の耳もとにいつまでも残っている。…

四十五年前の秋のある晩と夜明け方、万国殯儀館（国際葬儀所）の靈堂で、私は先生の靈柩の前に静かに立ち、上半

分がガラスになっている棺の蓋を通して先生のやさしい顔、固く閉ざした両眼、真つ黒な口ひげを見ていた。…私はどんなにか、先生が生き返られることを望んだことか！…

あの秋の日の午後、私は先生に告別した。私は七、八千の大衆とともに、先生のお伴をして墓地へ行った。暮色蒼茫たる中で私は、「民族魂」と書いた旗に包まれた棺が、墓穴の中へ降ろされるところを見ていた。¹⁰

魯迅の巴金への信頼は、最晩年の国防文学論戦を同志として戦う中で強くなったと思われるが、巴金の魯迅への敬慕の念にも深いものがあつたことが、『巴金全集』に残された魯迅を記念するこれら二十編ほどの心のこもつた文章から容易に見てとれる。

また、巴金が聞いたと言う魯迅の「私を忘れなさい」という言葉も非常に意味深長である。筆者は魯迅が共産党のスターリン主義的抑圧的体質に対して危惧を持つてきたと別著で書いたが、魯迅は自分自身が共産党と相容れない部分があることを自覚しており、それを巴金が受け継げば、共産党に弾圧されることを予期し、遺言として「私を忘れなさい」と巴金に伝えたと考えるほかないのではないか。巴金もそれは重々承知していたが、中共政権下では、そこまで書けなかつたということだろう。

魯迅は中共政権の成立を見ることなく逝き、巴金は中共統治下で、ついに民国時代の自作を凌ぐ新たな小説を書くことはできなかつたが、著名な作家として生き、文化大革命を経験した。魯迅の言葉の意味を、魯迅生前も、また新中国でも、よく理解したに違いない。共産党員ではなく、アナキストであつた巴金に対しては、魯迅も自由にもものが言える面があつたのではないか。そうした意味でも魯迅と巴金、アナキズムというテーマは、さらに深められるべき研究課題である。

ついでながら、魯迅と巴金は実はトロツキーの翻訳という点でも共通点があつた。魯迅がトロツキーの『文学と革命』の一部を翻訳したことや李霽野・韋素園訳の同書中国語版出版に尽力したことについては、別著に譲るが、¹²巴金がトロツキーの「トルストイ論」を翻訳していることについては、敢えてひとこと触れておきたい。これは一九二八年十月に『東方雑

誌』に訳載されたものである。¹³ トルストイの政治思想とは別に、その文学的格闘を評価した文章である。トロツキーの立場は魯迅のトルストイ論とも共通し、¹⁴ そしてそれは巴金とも共鳴するものであったということになる。巴金はこの翻訳の「はしがき」で、「最近ちよんど、トルストイの『戦争と平和』を読み終えたが、非常に感動し、今またトロツキーの文章を読んで、『わが意を得たり』のところがあつたので、時間をやりくりして訳出した」と書いている。トロツキーはレーニン死後の一九二五年にソ連閣僚の座を追われるまで、世界の左翼の間では疑いなくレーニンとならぶロシア革命の英雄だったが、アナキスト巴金が、ボルシェヴィキのトロツキーを訳しているのは興味深い。無論、それは文学的共感に基づくものであるが、一九二七年にソ連共産党を除名されたトロツキーの政治的地位の変動が巴金のこのときのトロツキー評価に影響を与えたのか否かも興味を引かれるところだ。そして、巴金はこの翻訳の「はしがき」末尾に「トロツキーは今シベリヤに追放されてしまった」と付け加えることを忘れていなかった。その答えは推して知るべしだろう。

二、巴金と魯迅との邂逅

さて、時を魯迅生前に戻そう。編集者としての手紙などによる間接的接触は別として、巴金はいったいいつごろ、いかにして魯迅と直接知り合ったのであろうか。諸説あるが、編集者・王仰農に巴金自身が語った言葉や巴金文学館・巴金研究会・巴金故居のウェブサイトでアップしている著名な巴金研究者、李存光編『巴金年表』によれば、それは一九三四年八月五日のことという。これは巴金自身が『魯迅日記』の記載を見て、よく吟味した調査結果であり間違いはないだろう。当日の『魯迅日記』には次のようにある。

生活書店より招かれ覚林で飲む。保宗とともに行く、同席者八名。¹⁶

保宗とは矛盾のこと。学研版『魯迅全集』訳注によれば、この場で、生活書店が魯迅提案の翻訳雑誌『訳文』の刊行につい

て魯迅と相談したのではないかという。この「同席者八名」の中に巴金がいたということである。『訳文』には矛盾のほか、巴金の親しい友人、黄源や黎烈文らが関わっており、巴金がこの席にいた蓋然性は確かに高い。

ついで、『魯迅日記』に巴金の名が記され、会見が明確に証明されるのは、この二ヵ月後の十月六日のことである。『魯迅日記』は言う。

夜、南京路飯店で巴金の送別会、保宗とともに行く、同席者八人。

巴金が日本に留学することとなり、友人たちが開いた送別会に魯迅も参加したわけだが、そこには巴金に対する魯迅の評価が表れていると考えていいだろう。一九二九年『滅亡』で上海文壇にデビューし、この前年の一九三三年には『家』を出版した巴金の実力は疑いなかった。魯迅も当然ながらこれらを読んでいた。この席で日本留学の先輩である魯迅は「日本の風俗人情、言葉が通じなかったためにおきた中国人留学生の笑い話をしたという」¹⁷。このときの巴金の日本留学とは、一九三四年十一月から一九三五年七月までのこと。短期間ながら巴金は日本にあって、東京外語支那語部出身で横浜高商助教授の武田武雄宅に下宿し、その後、東京に住んだ。特高に検挙された経験もある。このあたりの詳細は、藤井省三著『東京外語支那語部』（朝日新聞社、一九九二年）を参照願いたい。

日本留学から帰国後、巴金は友人の呉朗西が創立した文化生活出版社の主編となった。魯迅最後の小説集『故事新編』は文化生活出版社から巴金編の「文学叢刊」の一冊として一九三六年一月に出版されたものである。同書は魯迅生前に七版を重ねた。巴金の日本行以前から取り結ばれた魯迅との絆は『故事新編』でも生かされたわけである。上述のように、このころ、魯迅が創立、活動に尽力した左連は、中共自身の手によって解散させられ、その半年後に巴金は中国文芸工作者宣言を起草するのであった。

さてここで、魯迅と巴金との仲介者的役割を果たし得たと考えられる人物、胡愈之に注目しておきたい。胡愈之は一九一

○年代初め、魯迅が日本留学から帰国し、故郷の紹興府中学堂で先生をしていたときの生徒で、のちに、上海の商務印書館に入り、当時の中国を代表する総合雑誌『東方雜誌』の編集者、さらにはその寄稿者、作家としても活躍した。¹⁹ 胡愈之はまた中国における最初期のエスペランチストであり、実は一九二〇年に四川にいた巴金は上海の胡愈之にエスペラントに関することで教えを請うべく手紙を書いている。²⁰ また、中国のエスペランチストの公式歴史書ともいべき『世界語在中国（中国におけるエスペラント）²¹』が掲げる「中国世界語運動年表（1891-1983）」には、巴金と胡愈之らは一九二〇年八月に「上海世界語学会再建を發起した」（二七頁）したという記述がある。巴金とも親交のあった日本の巴金研究者山口守氏のご教示よれば、上述のように巴金は一九二〇年には上海に出ておらず、巴金と胡愈之が直接対面して「再建発起」したとは考えられないという。おそらく、一九二〇年の巴金の胡愈之宛書簡がこの「再建発起」と関係があるのだろう。ともあれ、一九二〇年の段階からすでに巴金と胡愈之は文通によって知り合っていたわけで、胡愈之にはその後の巴金と魯迅の仲介者になりうる資格があったことになる。上記『魯迅日記』一九三四年八月五日と十月六日の記す宴席には、魯迅は茅盾と出かけているが、茅盾は胡愈之と同じく商務印書館の編集者で同僚先輩でもあった。

ところで、魯迅自身もエスペラントとは縁が深く、エスペラント組織の会員に名を連ねたり、寄付をしたり、エスペラントの学校で教えたりしている。²² なかでも有名なのは、大正時代、日本にやってきたロシアのエスペランチストで盲目の詩人エロシエンコとの交友である。藤井省三著『エロシエンコの都市物語』²³によれば中村彝の絵でも有名なこのエロシエンコは、一九二二年の東京でのメーデー集会、さらに直後の社会主義同盟第二回大会に参加して検挙され、好ましからぬ外国人として日本政府から追放されてしまう。そこで、上海に渡るのだが、これを助けたのが日本と中国のエスペランチストたちであった。日本のエスペランチストから連絡を受けた胡愈之はかつての先生であり、すでに小説で文名を上げつつあった北京在住の魯迅に、エロシエンコの世話を頼んだ。魯迅は北京大学にエロシエンコの仕事をを見つけ、しばらく自宅にひきとり、生活をともにすることになった。このとき、上海から北京へエロシエンコの通訳として同行し、魯迅宅でエロシエンコとしばらく一緒に住んで世話をしたのが、李克剛²⁴というエスペランチストであった。李克剛はその後アナキストとなり、一

九二〇年代末のパリで留学生生活を送る巴金と親交を結ぶ。このようにしてエスペラントを介して巴金、胡愈之、エロシエンコ、さらにこの李克剛が連鎖していく。そして魯迅はその中心に位置することとなるわけだ。直接対面したことのなった胡愈之と巴金はパリで初めて顔を合わせる。巴金は一九二七年一月、留学のため、パリに向かい、胡愈之はこの年の四・一二クーデタ後、蒋介石弾劾の文書を書いて、国内にとどまることが危険となり、一九二八年初めにパリに亡命するのである。

こうして、すでに手紙のやり取りを通じて知り合いだったエスペランチストの同志二人は、文通八年にしてようやく、パリで対面を果たす。巴金は当地で最初の長編小説『滅亡』を執筆するが、胡愈之はこれを古巣、商務印書館の『小説月報』に紹介し、一九二九年一月からの連載が実現した。²⁶

巴金とこの魯迅の文字通り愛弟子である胡愈之との交友も、魯迅と巴金の邂逅を必然ならしめる要因の一つであったに違いない。

三、魯迅の葬儀と胡愈之、巴金

さて、ここで再び、一九三六年十月二十日から二十二日の魯迅の葬儀に立ちかえろう。魯迅の葬儀は抗日民族統一戦線結成に向けた中国共産党の一大プロパガンダとなった。²⁷ この葬儀の実務を実質的に取り仕切ったのが胡愈之であった。胡愈之は一九三三年に中共の秘密黨員になっていたが、当時は国民党からも、国民党から独立の民族主義者からも、非共産党系的人物と見なされていた。また胡愈之は魯迅の教え子もあつたから、魯迅側近であつても中共黨員であつた馮雪峰などより、葬儀を取り仕切るのには適任であつたのである（馮雪峰は幕後で胡愈之と協力した）。²⁸ というのは、共産黨員馮雪峰には国民党による逮捕・殺害の危険があり、安全上、前面に出ることは難しかったうえ、この当時の中共の戦術転換が背景にあつたからである。本文前述のとおり、中共は反蔣抗日つまり蔣介石に反対しつつ日本と戦うという路線から、蔣介石に反対するのではなく、蔣介石に抗日を逼るという逼蔣抗日に路線を転換していた。魯迅の葬儀もそうした路線転換に従つて、中共は一步退いて民族派を前面に押し出すことで彼らの抗日の要求を国民党に見せつけることが求められた。そして、魯迅の葬儀に

は蒋介石の当時の政策、安内攘外政策を批判する民族派で、魯迅葬儀の一ヶ月後には、国民党に逮捕され、抗日七君子として名を挙げる、章乃器、沈鈞儒らの救国会³⁰が前面に出たのである。救国会の活動は当時の中共の路線・方針とも一致するもので、胡愈之は前年の同会成立後から、中共党員の身分を秘して、この救国会運動にも深く関わっていたのである³¹。まさに胡愈之は、魯迅の葬儀の実務責任者³²には最適の人物だったわけである。そして、葬儀の現場で甲斐甲斐しく働き、棺を担いだなかに巴金、黄源、黎烈文初め、胡風や蕭軍ら党外の比較的若い文学者が多かったのもそうした事情があったと考えられる。

胡愈之は若干の矛盾はあったが、晩年の魯迅とは近い関係にあり、一九三二年末に中共主導で設立された中国民権保障同盟にも二人はともに参加しており、また胡愈之が秘密党員であったことを魯迅は知っていた³³。つまり、巴金が晩年の魯迅と主として文学活動を介して交際していた時期、胡愈之も魯迅の近くにいて、中共の秘密活動に従事していたわけだ。表面上、巴金と魯迅は文化生活出版社などの出版社や編集者ルートで接近したように見えるが、胡愈之と巴金とのエスペラント学会以来の縁、パリ時代の縁が、晩年の魯迅と巴金をつなぐ何らかの役割を果たしたのである³⁴。さて、民族派の救国会が前面に出た魯迅の葬儀では、魯迅の棺には「民族魂」という旗が被せられた。魯迅は徹底した国際主義者、階級論者であり、「民族魂」などと書かれた旗が自分の棺に掛けられようとは夢にも思っていなかったであろう。生前そんな計画を魯迅が知ったら、拒否したに違いない。実際、この葬儀の際も、魯迅直系の文学者、胡風、蕭軍は救国会が魯迅の葬儀の主役になることや、それと不可分の関係にあるこの「民族魂」の旗に反対したのである。救国会の章乃器は次のように回想している。

当時、おそらくは「中共」地下党の段取りで許広平さんが出て来て、沈鈞儒、鄒韜奮、史良それに私の四人で棺を担ぐように指定し、そして棺は「民族魂」と書かれた大旗で覆われていた。そのとき、胡風、蕭軍が出てきて反対した。我々がみな民族主義者で、国際主義者で国際的地位もある魯迅の棺を担ぐ資格はないと考えたのだ。許広平さんが頑張ってくれ、原案どおりに執り行われた。…（章乃器「我和救国会」一九六七年十二月十七日）³⁴

自前の思考力を持った胡風、蕭軍らの新中国での悲劇はこのときにはすでに決まっていたと言いうことができよう。人民共和国では魯迅の衣鉢を継ぐ文学者は一人として無傷で生き延びたものはいない。³⁵しかし、いささか慰めがないではない。胡愈之は共産党員として任務を遂行しつつも、自らの魯迅理解を曲げることはなく、魯迅逝去直後、葬儀の実務で忙しい十月二十日付で、民族主義者にとどまらない国際主義者としての魯迅を追悼する文章を残していた。³⁶魯迅の近くにいたものは魯迅の真実をしつかり見据えていたわけである。

ところで巴金はこの魯迅の棺にかけられた「民族魂」をどう見ていたのだろうか。アナキスト巴金の思想からしてもこの旗を受け入れることは難しかったであろう。先に引いた『真話集』では、「暮色蒼茫たる中で私は、「民族魂」と書いた、旗に包まれた棺が墓穴の中へ降ろされるところを見ていた」と客観的事実のみを記し、直接感想を記してはいない。しかし、巴金が本書で「私を忘れなさい」という魯迅の言葉をしきりに持ち出していることを、ここで思い出さないわけにはいかない。おそらく、漠然とではあれ、巴金にはのちの運命が見えていたのではないか。中共によつてどのような文学（者）が利用され、政治的必要性のために、国際主義者が民族主義者にすりかえられていくような捏造が行なわれるのかということ。そして、この一九三六年十月、人民中国成立の十三年前に魯迅は逝き、一方、巴金は二十一世紀まで生きて、魯迅が生きていたら経験したであろう苦難を魯迅に代わり経験したのであった。³⁷

ここで考えざるを得ないのは、研究者ならずとも、魯迅愛好者なら一度は写真で見ることがあるあの魯迅の棺の旗を、私たちは何の疑いもなく、当然のものとして受けとめてきたことである。毛沢東神話、中国革命のオーラはかくも強力であったのである。

筆者が「民族魂」について、「国際主義者にして階級論者であった魯迅が最も嫌うであろう旗幟で覆われた」と書いたのは、二〇〇八年のことである。それ以前は違和感はあったにしてもさほど不自然とも思わなかったということだ。二〇〇八年当時、筆者は、演繹的にそう考えざるを得なくなっていたのだが、「物証」があったわけではなかった。今回、章乃器の

この回想によって、筆者の演繹的推理は裏打ちされたと考えている。上述のとおり、魯迅直系の胡風、蕭軍は、この旗に象徴される救国会の魯迅の葬儀における主役化に反対したのであったが、思えば、魯迅の弟子としては当然の反応であったと言える。

四、李克剛の魯迅追悼文と奥野信太郎の『三田文学』への記載

最後に、先に触れたエロシエンコを一九二一年、上海から北京の魯迅宅に連れて行き、魯迅、周作人兄弟宅でしばらく一緒に暮らし、その後、パリで巴金と親交を結ぶ、エスベランチスト、アナキスト李克剛の魯迅追悼の文章を紹介しておきたい。李克剛は魯迅が逝去すると直ちに『中流』一九三六年十一月号に、「憶魯迅並及愛羅先珂」と題する追悼文を書いた。これは、すぐさま、奥野信太郎によって「魯迅とエロシエンコを憶う」という題で翻訳され、翌々月の『三田文学』（一九三七年一月号）に掲載された。³⁸ 奥野信太郎の日本語訳は次のような名調子で始まる。

北国の盲目詩人エロシエンコが七弦琴を携えてわが「沙漠」に漂泊して来た時のことである。³⁹ …わたくしはこの古い都城の西北角八道湾にある周家の苦雨齋⁴⁰に彼と居を同うし日々魯迅先生に見ゆる幸運を得たのであった。

ところで、さすがアナキストだけあって、李克剛は追悼文でも、魯迅を最初から絶賛したりはしない。魯迅は陰気で暗い感じがするうえ、人力車などという非人間的な乗り物を使うので、冷ややかに見ていたが、だんだん魯迅の本質が見えるようになり、敬意をもつようになったという内容である。この追悼文を書いた時期には、李克剛は巴金のアナキストの同志、個人的にも親友であるから、巴金の当時の魯迅観とも共通項があったことが想像される。その点でも注目すべき文章である。

さて、この訳者奥野信太郎については、著名な中国文学者であり、贅言は不要だろうが、念のため、若干の注を施す。⁴¹ 奥

野信太郎（一八九九—一九六八）は、一九二五（大正十四）年に慶應預科講師から始まり、戦中、戦後を通じて慶應中文の看板教授であった。戦後は日本中国学会会長を十三年の長きにわたって勤めてもいる。奥野は、魯迅が逝去する一九三六年秋から一年半にわたり、北京に外務省の特別研究員として留学していた。上海で魯迅が亡くなり、雑誌『中流』の追悼特集を北京で見た奥野は、李克剛の文章を訳し、『三田文学』に送ったということだ。訳文テキスト最後に付された書状風のメモの宛先が「和氣清三郎」となっているが、これは当時の『三田文学』の編集長である。それにしても興味深いのは、「哀悼魯迅先生專号」である『中流』同号には三十編以上の追悼文や詩が載っているのだが、奥野は李克剛のやや斜に構えた追悼文を選択している点だ。文人奥野の好みが反映してであろう。

最後にこの文章の研究史的な価値についてひとこと触れておく。筆者はこの奥野の翻訳をかなり以前に、飯田吉郎編『現代中国文学研究文献目録 増補版』（汲古書院、一九九一年）で知った。『三田文学』が魯迅逝去直後に追悼文を載せているのにまず驚いた。しかし、佐藤春夫と魯迅の關係などを考えれば、魯迅と『三田文学』は異色の取り合わせというわけでもない。ところで、研究者の世界では、この飯田氏の目録に載っている文献・資料は、「発見済み」のものであって、新発見の資料とは見なされない。ただ、日本の魯迅研究者や巴金研究者は『中流』の李克剛の追悼文を引く際、みな、その原文を直接使って、『三田文学』の奥野訳に触れることはまずないように見うけられる。今回、慶應義塾大学文学部125周年記念事業、展示会「語りつくせぬ思い——巴金と日本作家」上海巴金故居特別展に、奥野信太郎教授のこの文章を掲載した号の『三田文学』オリジナルが展示されたということは、ある意味で再発見であり、『三田文学』が歴史的に現代中国文学紹介に果たした役割を再評価することにも繋がるのではないかと思う次第である。

以上、魯迅と巴金の關係、魯迅の葬儀をめぐる政治力学を、先行論文と既発表の拙論によりつつ、若干の新資料、新視点を加味しながら分析を試み、ことのついでに李克剛の追悼文の奥野訳に触れた。走り書き的覚書の域を出るものではないが、引玉の瓦となれば幸いである。

1 本稿は二〇一五年九月五日、慶應義塾大学文学部「い周年記念事業の一環として、三田キャンパス北館一階ホールで開催された、『巴金と日本、および日中学術文化交流に関するシンポジウム』のために準備した口頭での発表原稿を改稿したものである（当初参加予定であった陳思和復旦大学教授が出席できなくなったため、筆者が急遽登壇する仕儀となった）。

2 『世界歴史体系 中国史5 清末〜現代』（山川出版社、二〇〇二年）一六八頁。長堀『魯迅とトロツキー』（平凡社、二〇一一年）三三四頁、注48は以下のように記した。

「王彬彬著『一九三六年的『救国会』与『民族魂』』（鐘山）双月刊二〇〇七年第四期）、参照。また当時の中共の政治動静は『中共中央文件選集』第十一冊（中共中央党校出版社、一九九一年）参照、特に「中央關於逼蔣抗日問題的指示（中央の逼蔣抗日問題についての指示）（一九三六年九月一日）」は端的にこの転換を示している。」

3 巴金著・石上韶訳『探索集』（筑摩書房、一九八三年）所収「四三 烈文を追慕する」、八六〜八七頁参照（本編「懷念烈文」は現行『巴金全集』人民文学出版社版では第十六卷所収。二〇〇〜二〇一頁）。なお、この辺の問題については丸山昇『答徐懋庸並關於抗日統一戦線問題』手稿の周辺」（『魯迅・文学・歴史』汲古書院、二〇〇四年所収。同編初出は『中国—社会と文化』8、中国社会文化学会、一九九三年）、河村昌子「巴金と読者—公開書簡集『短簡』と『随想録』を題材に—」（『千葉商科大学紀要』第四六集第一・第二合併号、二〇〇八年、のち、『巴金—その文学を貫くもの』中国文庫、二〇一六年、に収録）も参照。

4 前掲注2の長堀『魯迅とトロツキー』第七章（書誌詳細は省くが、本章の初出は一九九八年）参照。また、前掲注3の丸山昇「『答徐懋庸並關於抗日統一戦線問題』手稿の周辺」も参照のこと。

5 馮雪峰著「有関一九三六年周揚等人的行動以及魯迅提出『民族革命戦争的大衆文学』口号的経過（一九三六年の周揚らの行動及び魯迅が『民族革命戦争の大衆文学』というスローガンを提出する経過について）」による。（『新文学史料』第二輯、人民文学出版社、一九七九年二月。のち『雪峰文集』第四卷、人民文学出版社、一九八五年、収録）。

6 巴金「答徐懋庸並談西班牙的連合戦線（徐懋庸に答え併せてスペインの連合戦線について）」（『作家』一九三六年九月号、現行

- 7 『巴金全集』では第十八巻所収。学研版『魯迅全集』の本編の訳注（九）参照。
- 8 「魯迅先生追憶」（内山完造著『魯迅の思い出』、社会思想社、一九七九年、所収。初出は『改造』一九三六年十二月）。この紀文輯「送殯者登記簿録」全四冊には一、〇〇七名の個人名がある。その中には、著名人も多く、興味深い人名もある。例えば、本稿関係者としては徐懋庸も参列していたことがわかる。日本人の名も魯迅の主治医、須藤五百三夫妻を初め、東亜同文書院教授鈴木沢郎や戦後の著名な中国研究者で当時は上海毎日新聞記者だった岩村三千夫、さらには魯迅と親交のあった鹿地亘と戦後結婚する河野さくらなど十名以上が見える。特に、日本人名、朝鮮人名の詳細な調査分析が待たれる。
- 9 孔著「二三頁が引く巴金」一点不能忘却的記憶」による。なお、本編は『巴金全集』第十三巻所収「短簡」に「永遠不能忘却的記憶」とタイトルを変えて収録されている（山口守氏のご教示による。ここは六〇頁）。孔著と『巴金全集』テキストでは若干の異同があるが、ここでは初出（『中流』一卷五期、一九三六年十一月五日付）に基づく前者に従う。なお、『巴金全集』注によれば「弔辞を読んだ友人」とは胡愈之を指す。
- 10 巴金著・石上韶訳『真話集』（筑摩書房、一九八四年）所収「七十二 魯迅先生を追慕する」。同書八九〜九〇頁。現行『巴金全集』では第十六巻『随想録』所収。三四〇〜三四一頁。原題は「懷念魯迅先生」。なお、石上は訳注で、「私を忘れなさい（忘記我）」という言葉は、巴金が直接魯迅から聞いた言葉と解されるが、魯迅の死の直前の文章「死」（『且介亭雜文末編』）所収。初出は『中流』第一巻第二期、一九三六年九月二十日）にある、家族への遺言中の一条、「私を忘れなさい（忘記我）」とも通底すると書いている。
- 11 前掲注2の長堀『魯迅とトロツキー』特に第九、十章参照。
- 12 前掲注2の『魯迅とトロツキー』の第一〜四章及び第六章参照。
- 13 日本語では杉村昌昭・金井毅訳『革命の想像力』トロツキー芸術論（柘植書房、一九七八年）がこの「トルストイ論」を「詩人・反逆者としてのトルストイ」として収めている。なお、ここでの巴金の訳文テキストは、『巴金訳文全集』第五巻（人民文学出版社、一九九七年）によった。
- 14 丸山昇一『魯迅と「宣言一つ」』（『中国文学研究』中国文学の会、一九六一年四月。のち、『魯迅・文学・歴史』汲古書院、二〇〇四年、に収録）も指摘している。
- 15 『巴金書簡―致王仰晨』（文匯出版社、一九九七年）所収の一九七六年三月二五日付書簡による。李存光もこれに従ったと思われる。

- 16 訳文は学研版『魯迅全集』による。以下同。
- 17 学研版『魯迅全集』の訳注による。これは巴金の「魯迅先生就是這樣的一個人（魯迅先生はこのような人）」（『巴金全集』第十卷所収。ここは二四四頁）の言葉。この文章は巴金自身が魯迅との最初の会見を回想したもので、魯迅に対する思いもよく出ている。
- 18 人民文学出版社、二〇〇五年版『魯迅全集』第二卷所収「故事新編」の扉見返しによる。
- 19 胡愈之の経歴は、拙論「魯迅と胡愈之」（『日吉紀要 中国研究』第五号、二〇一二年三月）参照。
- 20 許善述『巴金与世界語』（中国世界語出版社、一九九五年）、三七七頁。
- 21 中国世界語出版社、一九九五年。
- 22 前掲注21の『世界語在中国』が掲げる「中国世界語運動年表（1891-1983）」参照。
- 23 みすず書房、一九八九年。
- 24 李克剛（一九〇三〜一九九九）については、晩年の李本人と親交のあった、山口守「去り行く世紀の記憶——巴金と友人たち」（『ユリイカ』一九九九年一月）による。呉克剛は巴金と同時期にパリにあって、ともに国際的なアナキスト組織、アナキスト・インターナショナルで活動、帰国後は、巴金は文学、呉は経済学の分野と専門は離れるが、友人であり続けた。呉は日中戦後、台湾に渡り、台湾大学教授を長く務めた。
- 25 李樹徳「巴金与胡愈之的友谊：通信8年之后才见面」（<http://history.people.com.cn/GB/205396/1570879.html>）などによる。これはのちに『百年春秋』の一冊、『旧聞遺珍』、中国文史出版社、二〇一二年、二七八〜二七九頁に収録されたというが未見。
- 26 于友『胡愈之』（群言出版社、二〇〇八年）六八頁。
- 27 中共は魯迅の葬儀を広範な大衆の追悼行動にしようとして意図した。本文前掲の孔海珠『魯迅——最後の告別』二九頁。前掲注19に同じ。
- 28 孔海珠『魯迅——最後の告別』十一頁に、宋慶齡が語る馮雪峰の言が引かれている。
- 29 救国会については『世界歴史体系 中国史5 清末〜現代』（山川出版社、二〇〇二年）一六七〜一六八頁参照。
- 30 胡愈之の救国会への関与については、前掲注26の于友著の第十二章「救国会的興起」参照。また前掲注19長堀「魯迅と胡愈之」にも書いたが、潘漢年は胡愈之に「以後、君は救国会のことだけやってくれ、ほかのことはかまうな」と指示していた（于友著一五三頁にもある）。救国会が中共にとってこのとき最重要の獲得対象だったことがわかって。
- 31

32

ちなみに葬儀委員長には魯迅の同郷の親友、蔡元培が自ら就任した。

33

前掲注19の長堀「魯迅と胡愈之」参照。

34

孔海珠『魯迅―最後の告別』一一八―一九頁の引用による。文革中に書かれた章乃器の本編は周天度編『救国会』（中国社会科学出版社、一九八一年）に収録されている。当該部分は四三七頁、孔著の引用と異同はない。

35

前掲注2『魯迅とトロツキー』第十章等参照。

36

同前「魯迅と胡愈之」の注1参照。「魯迅―民族革命的偉大闘士」（『胡愈之文集』、北京三聯書店、一九九六年、第三卷所収）を指している。魯迅は「民族革命の偉大な戦士」であるとともに「国際主義者」であったと胡愈之は記す。これは胡愈之のある種の「抵抗」と見ることもできる。

37

巴金は「憶魯迅先生」（『巴金全集』第十三卷所収）で、魯迅は「民族解放運動の中では偉大な戦士であり、人類解放運動の中では勇敢な先駆であった」（二三七頁）と魯迅思想の根幹を理解しており、中共政権下での苦難を必然と受け止めていたであろう。山口守氏のご教示による。

38

これはのちに『現代支那文学全集』第十卷（東成社、一九四〇年八月）に収録された。奥野信太郎訳の冒頭の一節。引用に当っては新字、新仮名遣いに変えた。二〇一五年九月五日のシンポジウムでは詩人の吉増剛造氏がフロアから発言し、奥野訳のこの冒頭の一文を激賞されたことを特記しておく。

40

周作人の書齋の齋号。魯迅・周作人一家は一九一九年から北京・八道湾十一号の家で同居したが、一九二三年の兄弟訣別後、魯迅はこの家を出た。その後、周作人は自らの書齋を苦雨齋と命名したが、やがてこの齋号は世上では八道湾十一号、あるいは周作人個人を指して使われるようになった。

41

奥野については、佐藤一郎・丸山信「奥野信太郎著作目録初稿」（『藝文研究』二七卷、一九六九年）、藤田祐賢「奥野信太郎年譜」（同前）参照。